

西王母

世阿弥作

前

ワキ 帝王

シテ 里女

ツレ 侍女

後

シテ 西王母

ツレ 仙女

地は 唐土

季は 春

ワキサシ

「有難や三皇五帝の昔より。今此御世に至るまで。
かゝる聖主のためしはなし。」

地

「其御威光は日の如く。」

ワキ

「其御心は海の如くに。」

地

「豊に広き御恵。」

ワキ

「天に輝き地に満ちて。」

地

「北辰の拱ずる数々のく。満天に廻る星の如く。」

百官卿相雲客や。千戸万戸の旗を靡かし。鉾を横

たへ。四方の門辺にむらがりて。市をなし。金銀

珠玉光りを交へ。光明赫奕として。日夜の勝劣見

えざりけり。かゝるためしは喜見城。其楽しみも

如何ならん。く。

シテ、ツレ一声

「桃李物いはず。下おのづから市をなし。貴賤交は
り隙もなし。」

シテサシ

「面白や四季折々の時を得て。草木国土おのづから。」

二人

「皆是れ真如の花の色香。妙なる法の三つの心。潤

ふ時や至りけん。三千年に咲く花心の。をり知る
春のかざしとかや。

下歌

「いざや君に捧げん。いざ／＼君に捧げん。

上歌

「すべらぎの。其御心は普くて。／＼。隙行く駒の
法の道。千里の外まで上もなき。道に至りて明ら
けき。靈山会場の法の場。広き教の真ある。君々
たれば誰とても。勇みある世の心かな。／＼。

シテ詞

「如何に奏聞申すべき事の候。

ワキ詞

「奏聞とは如何なる者ぞ。

シテ

「是は三千年に花咲き実なる桃花なるが。今此御代
に至り花咲く事。たゞ此君の御威徳なれば。仰ぎ
て捧げ参らせ候。

ワキ

「そも三千年に花咲くとは。如何さま是は聞き及び
し。其西王母が園の桃か。

シテ

「中々にそれとも今は物いはじ。

ワキ

「さればこそ、れぞ殊更名におふ花の。

シテ「桃李物いはず。

ワキ「春いくばくの年月を。

シテ「送り迎へて。

ワキ「此春は。

地「三千年に。なるてふ桃の今年より。く。花咲く

春に逢ふ事も。唯是れ君の四方の恵。あつき国土
の千々の種。桃花の色ぞ妙なる。

ロンギ地「さては不思議や久堅の。天つ乙女の目のあたり。

姿を見るぞ不思議なる。

シテ「疑ひの。心な置きそ露の間に。宿るか袖の月の影。
雲の上まで其恵。普き色にうつりきぬ。

地「うつろふ物は世の中の。人の心の花ならぬ。

シテ「身は天上の。

地「楽しみに。明けぬ暮れぬと送り迎ふ。年は経れど
限りもなき。身の程も隔なく。誠は我こそ西王母
の。分身よまづ帰りて。花の身をも顕はさんと。

天にぞ上りける。天にぞ上り給ひける。（中人）

ワキ歌

糸竹呂律の声々に。く。しらべをなして音楽の。

声すみ渡る天つ風。雲の通路心せよ。く。

地

面白や。かゝる天仙理王の。来臨なれば数々の。

孔雀鳳凰迦陵頻伽。飛び廻り声々に。立ち舞ふや

袖の羽風。天つ空の衣ならん。天の衣なるらん。

シテ

「いろくの捧物。

地

「いろくの捧物の。中に妙に見えたるは。西王母

の其姿。ひかり庭宇をかゝやかし。黄錦の御衣を

着し。

シテ

「剣を腰に提げ。

地

「剣を腰に提げ。真纓の冠を着。玉觴に盛れる桃を。

侍女が手より取りかはし。

シテ

「君に捧ぐる桃実の。

地

「花の盃取りあへず。（中の舞）

地

「花も酔へるや盃の。く。手まづさへぎる曲水の

宴かや。御溝の水に。戯ぶれ戯ぶるゝ手弱女の。
袖も裳裾もたなびきたなびく。雲の花鳥春風に和
しつゝ。雲路に移れば。王母も伴なひ攀ぢ上る。
王母も伴なひ上るや天路の。ゆくへも知らずぞな
りにける。